

第1章

投影法としてのカラー・ピラミッド・テスト

第1節 カラー・ピラミッド・テストの歴史 18

(1) カラー・ピラミッド・テストの創案 18

(2) カラー・ピラミッド・テストの発展 19

(3) 国際的な普及 20

(4) カラー・ピラミッド・テストの展開 21

第2節 投影法としての分類と特徴 25

(1) 刺激材料の特徴 25

(2) 考案の根拠 28

(3) 解釈の方式 29

(4) テストの目的 30

(5) 実施の方法 33

(6) 反応の様式 34

第3節 臨床技法としてのカラー・ピラミッド・テストの特色 37

さて、これからがカラー・ピラミッド・テストの入門です。少し回り道をしますが、第3章からの実施と解釈などの実際編に入る前に、そのイントロダクションとして、まずはカラー・ピラミッド・テストがどのような投影法テストであるのか、カラー・ピラミッド・テストの歴史、テストの特徴や特色を述べ、次章で性格検査の必要条件としての信頼性・妥当性など、カラー・ピラミッド・テストを理解するための基本的な事柄を概説して参りたいと思います。

第1節 カラー・ピラミッド・テストの歴史

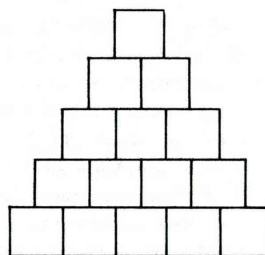
(1) カラー・ピラミッド・テストの創案

カラー・ピラミッド・テストは、1946年、スイス・チューリッヒ大学のフィスター(Pfister, M.)によって創案(未公開論文)され、次いで1950年、同じフィスターによって、14～30歳の被検者200名の検査・分析結果とともに発表された“Der Farbpyramiden-test”というわずか3頁の短い論文によって世に出されました。彼は、1辺2.5cmの正方形から成る24種(24色相)の色彩チップの中からどれでも自由にチップを選ばせ、同じく1辺2.5cmのマス目から成る5段のピラミッド図形にはめ込ませて、そのピラミッドの中の“選択された色彩”と“色彩の配置”からパーソナリティの構造を捉えようとしたのでした。

その折のインストラクションは次の通りで、これは今に至るカラー・ピラミッド・テストの教示の原型になっています。

「この箱の中から、どれでも自由にチップを取り出し、あなたのお好きなようにピラミッド板の上に並べて下さい。チップは取り替えてもかまいません。気に入ったピラミッドができたなら、チップを貼り付けてください。」(注)

(注：当時のチップは、ちょうど郵便切手と同じように、薄い紙片で、裏面に糊付けできるように粘着剤が塗布されていた。)



C P T 図版

フィスターはその論文の中で、色彩の配置(ピラミッドの構造)を対称・成層・陰影・単一色・分裂・左右・じゅうたんの8種に分類してパーソナリティ構造との関連性を示唆し、また各色彩の意味にも触れて、ここに、カラー・ピラミッド・テストは性格検査としての産声を上げました。

しかしながら、フィスターの提出したカラー・ピラミッド・テストは、ピラミッドを1個作らせるだけの単純なものであり、また、反応の整理の仕方や解釈の方法も簡単なものでした。それは、以下のような観点を明かせばすぐ分かるように、パーソナリティ・テストとしてはとても使用に耐え得ないものでした。

- ① **目的の不明確さ** (パーソナリティについて何を測定することができるのかが明確にされていない)
- ② **情報の乏しさ** (複雑なパーソナリティ構造に迫るにはあまりに情報量が少ない)
- ③ **反応の一過性、信頼性の低さ** (たった1回の反応ではある断面を見るだけでパーソナリティの全体像にはとても迫り得ず、とりわけパーソナリティの流動的、力動的な側面を見ることができない)
- ④ **反応分類の不足と解釈仮説の未熟** (テスト結果の整理と解釈方法が単純かつ未確立、特に解釈仮説が不十分)

このように、フィスターの創案したカラー・ピラミッド・テストは、最初、極めて未熟で不十分なものでした。とは言え、ピラミッド図形の中で色彩の選択と配置からパーソナリティを解釈しようとするアイディアは大変魅力的で興味深いものでした。フィスターのアイディアはその後すぐに、ハイスを中心とするドイツ・フライブルグ大学のグループに引き継がれ、本格的な投影法テストとして発展していくことになったのです。

(2) カラー・ピラミッド・テストの発展

フィスターの考案したカラー・ピラミッド・テストを臨床的に使用し得るテストとして発展させた最初の功労者は、ドイツ・フライブルグ大学のハイス(Heiss, R.)です。1951年、彼はヒルトマン(Hiltmann, H.)と協同して、フィスターが言う

「パーソナリティの構造」という漠然とした診断目標を「パーソナリティの情動性」へと明確化し、被検者の反応回数も増やして、3個連続して作らせることにしました。これによってテストの目的が明確になり、情報量も増し、パーソナリティの流動的、力動的な側面にまで迫ることができるようになりました。また、ハイスとヒルトマンは、例えば、「色彩症候群」とか「経過形式」とか、反応をより多角的、系統的にカテゴライズし、それぞれについて心理学的な解釈仮説を立てましたが、それらの多くは、現在に引き継がれています。

ハイスとヒルトマンによって発展させられたフィスターのカラー・ピラミッド・テストは、再びハイスを中心とするメンバーの手によっていよいよ本格的な投影法検査として生まれ変わるようになります。

1955年、ハイス、ホンスベルク (Honsberg, I.), カール (Karl, H.) の3人は、従来の、いわば“好むがまま”に作らせていた3個のピラミッドをできるだけ“美しく”作らせる「美しいピラミッド」シリーズ (schönen Pyramiden, pretty pyramids) に変更し、そしてそのシリーズに対する対照テストとして、できるだけ“醜い”ピラミッドを3個作らせる「醜いピラミッド」シリーズ (hässlichen Pyramiden, ugly pyramids) を付け加えました。これによって、カラー・ピラミッド・テストは、表層的・一次的な側面から、意識的側面と無意識的側面、顕在的側面と潜在的側面など、パーソナリティの異なる次元や側面に迫り得る、本格的な投影法性格検査として発展することになったのです。

それ以後、カラー・ピラミッド・テストは、フィスターが提出した24色を用いて、美・醜両ピラミッドシリーズを各3個ずつ作るという形式になり、それによる多くの実践と研究が行われるようになりました。ただ、これらの実践と研究はすべてドイツ語圏のものであったために、カラー・ピラミッド・テストを国際的に広めることにはなかなか繋がりませんでした。

(3) 国際的な普及

このカラー・ピラミッド・テストを国際的に広めることに貢献したのが、アメリカ・西バージニア大学のシャイエ (Schaie, K. W.) です。彼は1964年、ハイスと

共著で、英語による研究・手引書 *Color and Personality* を著しました。これによって、カラー・ピラミッド・テストは、アメリカ・イギリス両国を中心とする英語圏一般にも広く知られるところとなりました。しかも、この書は、ハイス等のドイツ語による手引書を翻案・英訳したものではなく、それまでのカラー・ピラミッド・テストの研究を、主としてシャイエによる独自の理論体系で纏めたもので、そこでは、反応の新しい分類方法や解釈仮説が提出され、また、アメリカにおける信頼度の高い標準データが示されています。このシャイエの業績によって、カラー・ピラミッド・テストはその形式・内容ともに一段と進み、充実して、本格的な臨床的使用への道が開かれたと言えるでしょう。

ここで我が国について言えば、カラー・ピラミッド・テストは初め、ドイツから直輸入され、1950年代後半から、秋谷たつ子、秋山博之、川久保芳彦ほか、多くの研究者によって活発に先駆的研究が行われました。しかし、解釈カテゴリーや解釈仮説の乏しさ、まして解釈の前提となる標準データの欠損が障壁となり、カラー・ピラミッド・テストは臨床的使用に至るまでには進まず、しばらくは研究も途絶えました。それが1970年代に入ってシャイエとハイスの英語版の書によって啓発された中川大輪が次々と臨床的使用を視野においた研究活動を行い、その流れの中で私たちの研究が後続し、標準化研究も成って、ようやく本邦においてもカラー・ピラミッド・テストの臨床的使用が可能になりました。

(4) カラー・ピラミッド・テストの展開

1) 修正版カラー・ピラミッド・テスト

このように、カラー・ピラミッド・テストは、フィスターの創案したものを改良しながら発展してきましたが、フィスターの用いた材料（24種の色彩チップと15マス目のピラミッド図版）についてはそのまま引き継いできています。しかし、カラー・ピラミッド・テストの発展につれて、臨床的に有効な色彩チップのみを用いようとする観点から、24色すべてを用いるのではなく、そこから色彩を限定してテスト材料とする試みが行われるようにもなりました。フィスターの提出した色彩チップをすべて使用するものを24色版カラー・ピラミッド・テストとする

なら、それらは14色版カラー・ピラミッド・テスト(Michel, L. 1959), 10色版カラー・ピラミッド・テスト(Reinert, G. 1958)ですが、とりわけミッチェルの14色版は重要です。

ミッチェルは、以下の3つの基準に照らして、フィスターの提出した24色から14色を選び出し、それを使用する改良版を提案しました。

- ① 互いに類似してははっきり区別することが難しいものは、1つだけ残す。
- ② 明度が極端なものは残す。
- ③ 因子的に分類が無意味なものは、どれか1つだけ残す。

カラー・ピラミッド・テストで用いられてきた24色がどのような基準で採用されたのかは、創案者のフィスター自身によって明らかにされていないだけでなく、カラー・ピラミッド・テストを引き継ぎ発展させたハイスらによっても検討されておりません。この24色の中には、たしかに色合い(色相: hue)がかなり近接したものが含まれています。そこでは、個々の色(色相)は必ずしも独立して解釈されることを要求されてはおらず、むしろ、赤(red)・橙(orange)・青(blue)などといった色彩群(color)ごとにまとめられて解釈されるようになっています。ミッチェルは、それぞれの色のこのような用いられ方は有益ではないし、それぞれの色はすべて独立して取り扱われ、解釈されるべきであり、また、多種の色を使用することはテストの安定性に関して問題がある、と考えました。彼は上述の手続きで色彩を選択的に減らすことによって、用いられるすべての色彩(14色)に対して個々に有益でかつ独立した意味を持たせ、また、テストの安定性を狙ったのです。

このミッチェルの14色版は、その後、シャイエとともに英語版を出したハイスにも強く支持されることとなりました。1975年、ハイスはハルダー(Halder, P.)とともに、この14色版を標準刺激とするカラー・ピラミッド・テストを標準化し、*Color and Personality* と同じHuber社から世に出しました。

修正版カラー・ピラミッド・テストの主要な目的は、ひとつにはテストの信頼性や安定性を増すことにあります。そして、たしかにそれに成功しています。しかし、色彩の種類を減らすことによって、被検者がさまざまな色彩刺激に対して

持っている固有の反応(人格次元の投影)の表出機会が奪われ、反応のレパトリリーが限定されてきます。さまざまな色彩刺激がさまざまな情動の世界を投影させるものであるなら、色彩数が減少することは、被検者の内的世界をより限定的にしか捉え得ないようになることを意味しています。類似した色相を1つに統一することはよいとしても、軽々に色彩数を減らすことは、カラー・ピラミッド・テストの内容的妥当性に関わる重大な問題です。

こうした意味あいから、私たちは、ミッチェルの提案する14色版とそれを24色版に代えて採用したハイスとハルダーに大きな疑問を抱いています。例えば、14色版では赤・緑・青といった基本的かつ重要な色彩(color)が各々2色相(hue)ずつですが、これではたして、各色彩(color)と関連するパーソナリティの諸側面を投影させ得るでしょうか。例えば、赤(red)が一般に外向的反応性や衝動性に結びつくことが事実としても、さまざまな赤色(色相差)に対する各個人の生理反応や経験値の違いなどを反映して、それらを具体的に投影する個々人の色あいには、大きな違いがあります。赤には、淡いピンクの桃色から、濃赤紫色の臙脂色^{えんじ}まで、ニュアンスの異なる無数の色あいがありますが、極端に言うと、ある人はピンク色に対して、ある人は臙脂色に対して外向性や衝動性を投影する色とし、同じ赤色であっても他の色あいでは代替性が無い場合があります。つまり、被検者がある特定の人格特性を投影する色彩を選択するか否かに、微妙な色相の差が大いに関わってくるのです。このようなことから、色彩をもってより正確にパーソナリティ次元に迫ろうとするときには、刺激として提出される各色彩(color)には、その色彩が投影させ得る人格特性を表出させるための、最大公約数的な必要最小限の数の色相(hue)が用意されていなければならないわけですが、私たちの臨床的な経験では、14色版ではあまりに数が少なくて、その要請にはけっして応えることができないのです。

すでに早く、シャイエは、カラー・ピラミッド・テストの修正版について、テストの信頼性は増しても、逆に妥当性の低下を招く、と述べています。私たちもシャイエに全く同感です。ただ、フィスターの24色のすべてが受け入れられる訳ではありません。今までのところ、私たちの実践的研究はすべて伝統的な24色版

を採用して行われていますが、多少の減色と色の入れ替えを行うことがあってもいいのではないかと、正直思っています。

2) テスト条件の変更

カラー・ピラミッド・テストは、美・醜両ピラミッド・シリーズを持つことによって、本格的な投影法性格検査となりました。とは言え、色彩とパーソナリティの間の関係を用いて主観的な心的内容を投影させるには、美・醜という2つの条件は必ずしも妥当ではありません。何故なら、美・醜という条件のもとでの反応は、少なくとも本邦では、被検者に対して、美学的観点に偏った方向に反応しようとする努力や、客観的基準あるいは好ましい基準と考えさせる外的基準を取り入れようとする試みを生じさせ、結局、被検者の内的・主観的世界を正しく投影することにはならない反応を導くことがあるからです。私たちが研究の当初はハイスやシャイエに倣って美・醜の条件下で調査・実験を行ってきましたが、臨床経験を積む毎に上記のことを強く印象づけられ、たくさんの試行的研究を経て、被検者の主観的世界により正しく迫ることを目指して、1979年から、テスト条件を美・醜次元(pretty-ugly)から好・嫌次元(like-dislike)へ変更し、好きな(気に入った)ピラミッド(好P)と嫌いな(気に入らない)ピラミッド(嫌P)を作るように、カラー・ピラミッド・テストを修正しました。

改めて述べますと、この修正は、人が色彩刺激に対してその情動的世界を投影するのは、“好き”と“嫌い”の感情を通して最もよく行われるという色彩生理心理学からの普遍的知見と、カラー・ピラミッド・テストにおける臨床的実験的な研究結果に基づいて行われたものです。この修正によって、それまで反応の意味があいまいで解釈が困難だとされてきた醜P(即ち嫌P)の意味を理論的に考察することが容易になり、カラー・ピラミッド・テストの新しい解釈仮説がもたらされることになりました(生武・井上 1998)。

以上、カラー・ピラミッド・テストはフィスターによって創案され、ハイスによって発展し、シャイエによって国際的に普及し、なお改善の余地を残しながら、今日に至っています。

第2節 投影法としての分類と特徴

前節で、カラー・ピラミッド・テストの歴史を見てきました。この第2節では、カラー・ピラミッド・テストがどのような特徴を持ち、それが投影法性格検査の中でどのように分類され、位置づけられるかを見ていきます。一般に、投影法を分類し特徴を明らかにすることの意義は、臨床的な要請に応じたテストの「選択的使用」と「組み合わせ」（テスト・バッテリー）を容易ならしめるところにあるのですが、カラー・ピラミッド・テストについてこれを行うことは、このテストのよりいっそう有効な臨床的使用を可能ならしめることになると思います。

さて、投影法テスト(projective test)という言葉は、マレー(Murray, H. A. 1938)の“投影テスト(projection test)”とフランク(Frank, L. K. 1939)の“投影法(projective method)”によって始まる、とされています。そして、当時から今日に至るまで多種多様の技法が開発され、またそれらをさまざまな基準で分類する方法が提示されていますが、ここでは、半世紀経った今でも、さまざまな各種投影法テストの特徴を際立たせるのに有効な、極めて包括的な視点に立ったリンゼイ(Lindzey, G. 1959)のそれに従って行うことに致します。

リンゼイは、従前の諸家の見解を概観・検討し、それに自己の見解を加えてまとめ、表1-1のような6つの観点を取り上げました。

ここでは、リンゼイのまとめたこの6つの観点

表1-1 投影法の分類基準（リンゼイ, G., 1959）

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none">① 刺激材料の特徴 (Stimulus Attribution)② 考案の根拠 (Method of Construction)③ 解釈の方式 (Manner of Interpretation)④ テストの目的 (Purpose of Test)⑤ 実施の方法 (Method of Administration)⑥ 反応の方式 (Mode of Response) |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

から多角的にカラー・ピラミッド・テストを検討し、投影法テストとしてのカラー・ピラミッド・テストの特徴を明らかにしていくことにいたします。

(1) 刺激材料の特徴

これは、テストの刺激材料が被検者によってどのように知覚され、どのように用いられるかといった観点、即ち、刺激材料の属性(attribute)に基づく分類基準です。

この観点からは、さまざまな下位分類基準が生まれてきます。リンゼイは、刺激材料の持つ感覚的属性と構造的性の2つを提出し、前者をさらに“視覚的”(例えばロールシャッハ・テスト)、“聴覚的”(言語連想検査)、“触覚的”(人物画テスト)に分けています。しかし、リンゼイのこの分類は、刺激の持つ単なる表面的な知覚特性に視点を置くだけのシンプルにすぎるもので、刺激材料が被検者にどのような意味を持ち、どのように用いられるかといった、刺激と被検者との力学的側面が忘れられています。こうした点を加味して“刺激材料”をさらに細かく分類しているのがベル(Bell, J. E. 1948)、それに従って各種投影法テストを分類したものが大伴公馬(1977)の表1-2です。

カラー・ピラミッド・テストは、すでに明らかなように、色彩チップを刺激材料としています。これはまぎれもなく、視覚的なものであり、この“視覚的”という観点にのみ立てば、カラー・ピラミッド・テストはロールシャッハ・テストやTAT、絵画欲求不満テスト、MAPSなどと同様に“視覚的刺激”のカテゴリーに入ります。

しかし、カラー・ピラミッド・テストは、色彩チップという視覚的刺激を用いているものの、刺激材料の持つ意味とそれ(刺激材料)に対する反応のメカニズムは、ロールシャッハ・テストその他とは明らかに異なります。即ち、ロールシャッハ・テストなど一連のテストの刺激材料は被検者の内的世界を投影させるべく初めから深い意味を含むように作り上げられ(加工)、“固定的”と言えますが、一方、カラー・ピラミッド・テストでは刺激材料はあまり深い意味は持たず、生の粗材料のまま与えられ(未加工)、どのように形を整えて最終的な“刺激物”になるのかは、被検者次第であり、いわば“流動的”なのです。そして被検者は、前者では与えられた刺激物に受動的に自己を投影するのに対し、後者(カラー・ピラミッド・テスト)では、自己を投影する形で主体的、創造的に新しい“刺激物”を生み出し、それに自己の内的世界を表現していくのです。

表 1-2 刺激素材による投影法の分類 (大伴公馬, 1977)

<p>素 刺 材 激</p>	
<p>(1) 絵 画的 筆 蹟 的 表 現 お よ び 運 動</p>	<p>① 自由描画法 (抽象的分析—色・線・空間など; 意味内容分析; 構造的 analysis—たとえば説明的・並列的・感情的など ② フィンガー・ペインティング (Finger Painting—指絵法) ③ モザイク・テスト (Mosaic Test) ④ 人物画テスト (自我像の分析) ⑤ 動物・船画テスト ⑥ 樹木画テスト (Tree Test) ⑦ H T P (House Tree Person Test—家・木・人画テスト) ⑧ 形態色テスト (着色の順序・配合・形態・移行の分析) ⑨ 形態模写テスト (Bender Visual Moter Gestalt Test) ⑩ 絵画完成テスト (Completing Picture Test—線の使用法, 構図などの分析) ⑪ ミラ筋肉運動診断テスト (Mira Myokinetic Diagnosis Test) ⑫ 筆跡 (Handwriting—動き, 形, 配列の分析)</p>
<p>(2) 視 覚 的 刺 激 に よ る も の</p>	<p>⑬ ロールシャッハ・テスト (Rorschach Test) ⑭ クラウド・ピクチャー・テスト (Cloud Picture Test) ⑮ T A T (Thematic Apperception Test—主題統覚テスト) ⑯ C A T (Children's Apperception Test—児童の家庭生活の分析) ⑰ ブラッキー・テスト (Blacky Test—精神分析的診断) ⑱ P A T (Picture Arrangement Test—絵画整理テスト) ⑲ P F T (Picture Frustration Test—絵画欲求不満反応型の分析) ⑳ M A P S (Make a Picture Story Test) ㉑ F P T (Four Picture Test)</p>
<p>(3) 言 語 的 刺 激 に よ る も の 文</p>	<p>㉒ 言語連想テスト (Word Association Test) ㉓ S C T (Sentence Completion Test—文章完成テスト) ㉔ インサイト・テスト (Insight Test—葛藤分析) ㉕ 物語完成テスト (Story-telling and Completion Test, Story Elaboration Test) ㉖ 音声・談話テスト (Voice and Speech Test—表現運動・伝達の内容などの分析) ㉗ 聴覚テスト (Tautophon Method—あいまいな音刺激による連想分析)</p>
<p>(4) 遊 戯 と 劇</p>	<p>㉘ 遊戯テスト (Play Test—人形による遊技分析, 玩具による遊戯分析) ㉙ ワールド・テスト (World Test—小玩具による生活投射法) ㉚ 粘土細工 (Clay Modelling—造型的創造機能の分析) ㉛ 三次元パーソナリティ・テスト (3 D P T; Three Dimensional Personality Test—立体粘土塊を刺激として命名, 物語反応の分析) ㉜ 心理劇 (Psychodrama—創造性, 自発性, 役割などの分析) ㉝ 人形劇 (Puppet Show—人形に対する同一視の分析)</p>
<p>(5) そ の 他</p>	<p>㉞ ソンディ・テスト (Szondi Test—家族的無意識における選択衝動欲求の分析)</p>

このように考えるとき、カラー・ピラミッド・テストは、バルー大伴の分類に従えば、フィンガー・ペインティング、モザイク・テスト、バウム・テスト、HTPなどと同様に、“表現と運動”のカテゴリーに属することになるでしょう。

(なお、表1-2の⑧形態色テストは、社会心理学者の外林大作氏がカラー・ピラミッド・テストに模して作った独自のピラミッド・テストだと思われます。)

(2) 考案の根拠 (経験的か理論的か)

テストがどのような根拠に基づいて作られたのか、その違いによって各技法を分類するものです。

テストが考案される時、その拠りどころとなるのは、基本的には、理論的な裏付けと経験的な事実の二つです。例えば、TATと絵画欲求不満テスト(PFT)は、マレーの欲求圧力説とローゼンツヴァイク(Rosenzweig, S.)の欲求不満一攻撃仮説にそれぞれ基づいて考案されたものであり、サイコドラマや絵画配列テストなどは、経験的・臨床的な有効性から創案されたものであると言えます。また、ロールシャッハ・テストは、現在では精神分析的理論で裏付けられるようになっていますが、もともとは特定の理論はなく、経験的な事実関係から創案されたと言われています。このように、すべてのテストは、理論と経験のどちらか(あるいは両方)に基づいて作られているのです。

カラー・ピラミッド・テストは、色彩とパーソナリティの関連に着目して作られたテストです。この点を強調すれば、これはひとつの理論だと言えますが、しかし、創案者のフィスター以前のもっと古い時代から、色彩とパーソナリティの関連は経験的にも実験的にも明らかにされています。従って、創案時の事情で言うなら、フィスターは広い意味でのそれらの経験的事実に着目してカラー・ピラミッド・テストを開発したのでしょうかから、この点に限って言えば、“経験的”だと言えるかもしれません。しかし、ここでまた翻って考えると、単に色彩の選択だけではなく、色彩の配置、即ちピラミッドの構造の中にパーソナリティ構造が投影されるとするアイディアは、知覚とパーソナリティの理論を前提にして、刺激と反応、そしてその媒介変数との結びつきに確かな見通しを持っており、こ

これは新しいひとつの理論と認められます。こうして、カラー・ピラミッド・テストは、単に“経験的”であるのではなく、“理論的”な背景をも合わせ持つて生まれたものと言えるでしょう。

(3) 解釈の方式（形式分析か内容分析か）

テスト結果の解釈方式の差異による分類基準です。

投影法テストの結果や反応の分析と解釈は、通常、大別して2つの方法を通して行われます。1つは形式分析であり、他の1つは内容分析です。形式分析とは、被検者の反応に含まれる具体的な内容には関知することなく、その表面的な形式的側面（例えば、ロールシャッハ・テストでは、反応数・反応領域・決定因・形態水準など）に限って分析・解釈を進める手続きであり、内容分析とは、被検者の知覚し反応したものの中に含まれる表象やイメージなど、具体的な反応の内容に立ち入って分析・解釈をしていく方法です。

一般に、形式分析では結果や反応の整理がより計量的、操作的で客観的であるのに対し、内容分析ではより非計量的で主観的になり易いという欠陥があります。しかし、形式分析ではより客観的であろうとするだけに、解釈上の限界が生じ易いのに対し、内容分析では、鋭い臨床的な観察や洞察を加えて、被検者の内的世界に深く迫り得るといふ長所を持っています。また、次の項で述べることも関連しますが、一般に、形式分析はパーソナリティの基礎的・形式的側面を、内容分析はその錯綜的・力動的構造を明らかにする働きを持つと考えられます。

そこで、多くの投影法テストは、なるべく多角的にパーソナリティにアプローチしようとして、この2つの分析方法を積極的に用いて、テストの診断内容や診断領域を拡大しようとする傾向があります。因みに、ロールシャッハ・テストとTATは、本来的には、前者では形式分析、後者では内容分析が第一義的なのですが、次第にそれぞれもう一方の手法も活発に用いるようになり、昨今ではそこにも大きな重みがかかるようになってきました。こうした傾向は、しかしながら、それぞれの技法が本来的に持っている診断領域や分析手法を超えて機能や手法を拡大しようとすることに連なり、かえって、各技法に備わっている独自の診断

機能や使用価値を損ねることにもなり得ます。最近の各投影法技法の研究・実践動向を眺めるとき、必ずしもその真なしとはしないようです。

こうした中で、カラー・ピラミッド・テストは、選択された色彩（あるいは選択されなかった色彩）の意味と選択された色彩(チップ)によって構成された形質(構造)の意味を問う内容分析と、選択された各色彩が3つあるいは6つのピラミッドの間でどのような関係性を持つかをいくつかの観点から操作的に数量化してその意味を問う形式分析の2つが、どちらが主要ということなく、そろうべくして揃っているユニークなテストです。

これを少しばかり手前みそに言い直すと、カラー・ピラミッド・テストは、ともすれば主観的、独善的な解釈に陥りやすい危険性は持つものの人格深層部への肉迫を可能にする投影法ならではの醍醐味を味わう内容分析という手法と、しかし一方で主観的、独善的な解釈に陥る危険性から逃れ出るための客観性と科学性を飽くことなく追及する形式分析という2つの手法を同時に併せ持つ優れた投影法テストと言えるのです。

(4) テストの目的

テストが何(パーソナリティのどのような側面)を明らかにすることを目的としているか、あるいは、何を明らかにすることができるか、即ち、各技法がどのような診断目標や診断領域を持っているか、という観点です。

臨床的なパーソナリティ診断においては、「テストの選択的使用」と「テスト・バッテリー」は基本的にして不可欠のあり方です。それは、使用される技法(テスト)はケースの要請するもの(明らかにされるべき被検者のパーソナリティの側面)に最も適合するものでなければならないからであり、また当然のこと、どのテストもそれひとつではパーソナリティのすべての面に深く正しく迫ることはできないからです。先に、投影法を分類し特徴を明らかにすることの意義はテストの「選択的使用」と「組み合わせ」を容易ならしめることにあると述べましたが、それを含めて臨床的な要請に応える有効なテスト使用を実現するには、何よりもまず、それぞれの技法に関して、有効性や妥当性の最も高い固有の診断領域

が明確にされていなければなりません。このような意味で、「テストの目的」はとりわけ重要な分類基準だと言えます。

リンゼイはこの下位分類基準として、次の3点を挙げています。

- ① **パーソナリティの全般的把握** (General Personality Description)
- ② **特定のパーソナリティ次元の評価** (Assessment of Specific Attributes)
- ③ **精神的障害の発見** (Identification of Diagnostic Group)

投影法テストに限らず、すべての性格検査は、パーソナリティを広く包括的に捉えるか、あるいは、狭く限定的に捉えるかのどちらかです。しかし、投影法テストについて言えば、パーソナリティの各側面を単に形式的・構造的に明らかにするだけでなく、それらの力動的な関係に迫ることができるのです。これは、質問紙法や作業検査法など、その他の性格検査では容易にはなし得ない、投影法独自の機能と特徴です。この点から見直すと、リンゼイの下位基準はやや単次的で、幅輻性に欠けています。そこで私たちは、リンゼイのそれを土台にして、次のような下位分類カテゴリーを提出し、その中にカラー・ピラミッド・テストを位置づけることにいたしました。

- ① **パーソナリティへの全般的・多次元的アプローチ**
 - ㉞ **パーソナリティの基礎的・形式的構造。**即ち、独創性・生産性といった知的機能、反応性・衝動性といった情動性、統合性・柔軟性といった自我機能等々。
 - ㉟ **パーソナリティの錯綜的・力動的構造。**即ち、外的な行動や特性を生み出す欲求・動機、これらと関係するコンプレックス・葛藤、防衛機制、対人関係様式等々、内的世界の構造と力動。
- ② **パーソナリティの特殊な限定された次元へのアプローチ**
- ③ **①と②のアプローチに関連しつつ明らかになる精神病理や精神障害**

カラー・ピラミッド・テストは、パーソナリティの広い範囲にわたってアプローチが可能な、包括的な投影法性格検査です。もちろん、この3つの領域のすべてを診断目標とし、それらに有効なアプローチをすることはできます。しかし、極めて謙抑的にその臨床的使用の目的を限れば、それは上記の①-③の領域（パ

パーソナリティの基礎的・形式的構造、即ち、独創性・生産性といった知的機能、反応性・衝動性といった情動性、統合性・柔軟性といった自我機能等々)と①-④の一部ということになります。何故なら、カラー・ピラミッド・テストは、情動性や自我機能、さらにパーソナリティの成熟に関する一般的指標といった、パーソナリティの基礎的・形式的側面の診断に最も高い有効性と妥当性を持っているからです。ここで、他の主要な投影技法を同様に位置づければ、ロールシャッハ・テストは①-⑦、TATは①-④、絵画欲求不満テストは②となります。ただ、理論的あるいは実際の立場の相違によって、異なる場所に分類されることもあり得ます。例えば、ロールシャッハ・テストが①-⑦、あるいは③が使用目的とされる場合もけっして少なくはありません。

なお、ここでひとつ、付言しておきたいと思います。最近では、どのテストも、より包括的にパーソナリティの諸側面に迫ろうとして、ややもすると、その診断機能を広げようとする傾向が見られます。しかし、繰り返して述べますが、1つのテスト技法だけではけっしてパーソナリティのすべての側面を深くかつ包括的に捉えることはできないのです。どの技法にも、最も得意な、妥当性の高い診断領域があるはずであり、その積極的な利用(即ち、パーソナリティの解釈・診断)は、常にその守備範囲に留まり、不得手な部分はそこを得意とする他の技法に委せるべきだと思います。ここにこそ、テスト・バッテリーの考えが浮かんでくるのです。にも拘わらず、パーソナリティを包括的に診断し得るとされる技法においては、得てして、何に対しても等しく有効だとする誤解や信念、さらには個人的な好み等によって、やみくもに用いられる傾向があります。こうなってはもはや、テスト(の施行)は、ケースや被検者(クライアント)のために利用されるのではなく、テスター自身のためにのみ使用されていると言っても、過言ではなくなります。その結果、その技法本来の目的や有効性まで見失われ、また、ケースに応じたより有効な他のテスト技法の使用が妨げられたり、クライアントを害することになったりもいたします。「テストの目的」に精通し、各テストを謙抑的に用いることは、テスト使用における重要な倫理的綱要のひとつだと思います。

(5) 実施の方法

実施方法上の相違や特徴に基づく分類基準です。このうちよく用いられるものとして、被検者が個別か集団かの「テストの実施形態」とテストの実施に熟練を要するか否かの「実施の難易度」がありますが、ここでもこの2つの次元から取り上げることいたします。

2つの次元を組み合わせると、一般的には、集団式は実施が容易く、個別式は難しいと言えます。絵画欲求不満テストや文章完成法テスト(SCT)は前者の例であり、ロールシャッハ・テストやTATは後者の例です。しかし、カラー・ピラミッド・テストは、個別式投影法テストでありながら、すでに見ましたように、教示の仕方は極めて簡潔、また後述しますが、被検者の反応を記録する方法も極めて簡便で、カラー・ピラミッド・テストにほとんど通じていないテスターでも容易に実施することができます。このことは、カラー・ピラミッド・テストの著しい特徴で、他に類を見ないと言えるでしょう。

本分類基準に関しては、リンゼイ(1959)が挙げる、以下のような下位基準も大変興味がかかります。リンゼイは「実施」の概念を広く受け止め、

- ① 反応に一定の枠組みを与えているかどうか（例えば絵画配列テストやソディ・テスト）
- ② 反応が自由に行われ得るかどうか（例えば、ロールシャッハ・テストやTAT）

の2つの観点を取り上げています。これらは、いわば反応の「枠組度」と「自由度」とでも言うべきもので、普通、両者は対極的な関係にあり、枠組度が高ければ反応の自由度は低くなり、枠組度が低ければ自由度が高くなると思われのですが、MAPSやブラッキー・テストのように、ある程度の反応枠は与えられていても反応の自由度は極めて高いものもあります。2つの次元を一応同一線上に並べた場合、絵画欲求不満テストや文章完成法テストなどは、恐らく、どちらの次元においても中間的な位置に置かれるでしょう。カラー・ピラミッド・テストは、ピラミッドという反応枠は与えられてはいますが、反応の自由度はロールシャッハ・テストやTATと同じように極めて大きく、これらの基準では、ちょ

うど、MAPSと同程度に位置づけられると思われます。

その他、実際的な問題として、時間制限がないにも拘わらず1人の被検者に要する実施時間が際立って短いことや（通常、10～20分）、ほとんど抵抗や抑制心が働くことなく気軽に楽しみながら反応することができる、といったことなども、カラー・ピラミッド・テストの注目される特徴です。

(6) 反応の様式

被検者に要求される反応の様式、あるいは、反応に際して用いられる心的機能に着目して分類するものです。

フランク(1939)は投影法の分類に着手した最初の人ですが、彼はこの基準に基づいて、①構成法 (constitutive ; 例えば、ロールシャッハ・テスト、フィンガー・ペインティング)、②解釈法 (interpretative ; TAT、絵画欲求不満テスト、文章完成法テスト)、③浄化法 (cathartic ; 描画法、サイコドラマ)、④組立法 (constructive ; モザイク・テスト)、⑤歪曲法 (refractive ; 筆跡、音声) に分類しました。

しかし、リンゼイ(1959)は、これには反応の様式以外の観点も含まれ、また互いに重複する部分がある、と批判的に考察し、これを一歩進めて、次のような分類を行いました。

① 連想法 (associative technique)

与えられた刺激材料に結びついて連想されてくる心的内容(言語・イメージ・表象など)を表現するように求められる技法です。例えば、ロールシャッハ・テスト、言語連想テスト、クラウド・テストなどがあります。

② 構成法 (constructive technique)

未構成な刺激材料を利用して、物語や絵など人工的に何か創り出すことを要求されるもの。TAT、MAPS、ブラッキー・テストなど。

③ 完成法 (completion technique)

不完全な刺激材料を好むがままに完成させるもの。SCT、絵画欲求不満テストなど。

④ 選択法または配列法 (choice and ordering technique)

一定の基準(例えば、正しさ、美醜、好嫌)に従って刺激材料を選択したり配列したりするもの。ソンドイ・テスト、絵画配列テストなど。MAPSやブラッキー・テストもこれに一部関連しています。

⑤ 表出法 (expressive technique)

自ら能動的に動いて内的世界を表出するもの。HTP、バウム・テスト、DAP、フィンガー・ペインティング、サイコドラマなど。この技法は特に診断と治療が同時に進行するという点に大きな特徴があります。

リンゼイはフランクの分類基準の曖昧さを批判して、上のように新しい下位分類カテゴリーを提出しました。しかし、リンゼイのそれもまた、必ずしも明快な分類とは言えない部分もあります。例えば、ロールシャッハ・テストには構成的要素が少なくないし、TATには連想メカニズムが含まれるので、それぞれ構成法と連想法に分類することも可能です。が、人が何ものかへ反応するときには、必ず複数の心的メカニズムが関わるはずであり、ほとんど単一の機能や様式で反応することはないでしょう。これから思えば、反応別という観点からの分類では、本来的に、1つのカテゴリーのみに分類することは容易ではありません。この点に留意しながら(必ずしも厳密さを要求しないで)、カラー・ピラミッド・テストをリンゼイのそれに従って分類すれば、それは選択・配列法あるいは構成法ということになります。カラー・ピラミッド・テストは、①刺激を選択的に選んでそれを一定の基準(美醜または好嫌)に従って配列(ピラミッド形)するからであり、②未構成な刺激材料(色彩チップ)から構造的なもの(ピラミッド)を構成していくからです。さらに、カラー・ピラミッド・テストには、一連の描画テストと同じように、表出法的要素もけつして少なくはありません。

この「反応の様式」という基準は、テスト・バッテリーを組むといったような実用的な観点から見た場合、「テストの目的」と並んで、最も重要な分類基準の1つです。しかしながら、この基準は、上に見ましたように、個々のテスト技法を必ずしも明快に分類できるものでもありません。リンゼイはこれをもって最もよい分類基準としていますが、これに従って臨床的に使用するバッテリーの1つ

としてテストの選択をするときには、他のテストと互いに重複するところができるだけ小さくなるように、慎重な選別・選択を行う必要があるでしょう。

以上、投影技法を分類する様々な観点からカラー・ピラミッド・テストの特徴を見てきました。

最後に、カラー・ピラミッド・テストを含めて主要な投影法テストを分類・一覧表にすれば、表1-3のようになるかと思います。なお、○は妥当、◎はより妥当していることを示しています。

表1-3 投影法の分類 (宗内 敦, 1983c)

基準	下位分類	ロールシャッハ テスト	T A T	P F T	S C T	C P T
テストの 目的	多面・全般的	◎	◎		○	◎
	形式	◎	○		○	◎
	力動的	○	◎		○	○
	特殊・限定的	○	○	◎	○	○
	人格の病理	○				○
考案の 根拠	理論的		○	○	○	○
	経験的	○			○	○
刺激材料の 特徴	運動・表現					◎
	視覚的刺激	◎	◎	◎	○	◎
	言語的刺激			○	◎	
	遊戯と劇 構 造 性	小	中	大	中	小
実施の 方法	集団-個別	個	個	集	集	個
	難 度	高	中	低	低	低
反応の 様式	連想法	◎	○			
	構成法	○	◎	○	○	○
	完成法			◎	◎	
	選択・配列 表 出 法					◎ ○
解釈の 方式	形式分析	◎	○			◎
	内容分析	○	◎	◎	◎	○

第3節 臨床技法としてのカラー・ピラミッド・テストの特色

前節では、投影法性格検査の分類基準に照らして、他の投影法テストとの比較の上で、カラー・ピラミッド・テストがどのような特徴を持ち、どのように分類されるかを見てきました。加えて本節では、カラー・ピラミッド・テストを臨床的に用いてみたいとお考えの方々のために、カラー・ピラミッド・テストは実際にどう用い得るのかというプラクティカルな観点から、臨床技法上の特徴をまとめておきたいと思います。

以下に、とりわけ傑出している6点を挙げますが、①から⑤までの項目はテスト実施上の観点、最後の6番目の項目(⑥)が解釈・診断上の観点からの特徴ということになります。

① 実施手続きが簡便

カラー・ピラミッド・テストの実実施手続きは第4章で詳述されます。それを一読されれば、カラー・ピラミッド・テストのテスト構成が如何に簡潔であるかが分かりますが、テスト実施の教示はほとんど定型化され、しかも、かなり理解力の低い幼児や児童にも容易にその意味が伝わるような簡便かつ明快な文言なので、実施者が余程の緊張するタイプでもない限り、実施者のカラー・ピラミッド・テストに対する造詣の程などにも関わりなく、誰でも容易にテストを施行することができます。

② 被検者は遊戯的感覚で楽しく受検する

私たちは、カラー・ピラミッド・テストの標準化のために各地の小学校、中学校、高等学校を回り、実験(テスト実施)を行ってたくさんの資料を得て参りました。その折、実験終了後のことですが、サンプル用の実験を終えた仲間の被検者から聞いて、少なからぬ児童・生徒が本テストに大きな関心を抱き、我も我もと受検を希望してくるため、よく学校に居残ってサービスとしてのテストを行って参りました。もちろん、テスト終了後には簡単な性格診断のサービスも忘れたことはありません。そうした中で、色彩刺激を用いるカラー・ピラ

ミッド・テストは、遊戯的感覚で楽しく受検することができ、被検者がひとときの憩いを得ることさえあるテストだということが、実感されました。

③ テスト時間が短い

ほとんどの被検者が楽しい雰囲気の中であつと言う間に終え、ほとんど10～20分で終了し、テスト時間が長時間かかる人は多くありません。だからと言って、被検者が無責任に反応しているわけでは、けっしてありません。テストの作業内容が興味深く、かつ容易で楽しいから、短時間で終了するのです。

④ 被検者の抵抗や防衛が少ない

カラー・ピラミッド・テストは単に色彩刺激に対する反応を行うだけですから、上述したように、遊戯的感覚で楽しく受検することができます。また、知能検査や学力検査のように正解や誤答があるわけではなく、道徳的、倫理的な正邪・善悪の判断を下されるようなテスト内容でもないのです。被検者はほとんど特別な抵抗感や防衛心を持つことなく、率直に自分を表現することができます。

⑤ 結果の整理が簡単、解釈も客観的

カラー・ピラミッド・テストでは、形質以外の臨床尺度(反応尺度)はすべて数量化され、標準化されています。被検者の反応結果は、記録用紙の所定の欄内に記入し、それを標準化されたデータに比較して解釈を行っていただくだけです。それ故、初心者でも容易く正確に結果を整理し、主観的な判断に偏ることなく、客観的に解釈を進めていくことができます。

⑥ パーソナリティの際立った特徴を捉えることに優れる

すでに述べましたように、さらにまた第4章以下で詳述して参りますように、カラー・ピラミッド・テストの診断領域は、単にパーソナリティの情動的側面に留まらず、広く自我機能や知的機能にも及び、パーソナリティの全領域に渡っています。これは、代表的な投影法性格検査であるTATやロールシャッハ・テストと全く同じだと言えますが、しかし、私たちのこれまでの臨床的経験によれば、カラー・ピラミッド・テストは、パーソナリティを全般的、包括的に捉えることよりも、むしろ平均を大きく超えて際立つ特徴を捉えることに優れ

たテストだと言えます。そうした中から、ここで幾つか臨床上重要な項目を取り上げてみますと、例えば次のようなものがあります。

- ㊦ きわめて反動的，きわめて抑制的などといった情動・行動の偏り
- ㊧ 緊張，葛藤，不安など，ネガティブな情動性
- ㊨ 深刻な生活領域の狭まりや防衛機制
- ㊩ 知的機能の混乱や損傷
- ㊪ 創造性人格や拡散的思考力など，いわゆる創造性

どれもみな，深いレベルの適応・不適応と関連する項目です。臨床家なら，クライアントを前にしたとき，そのクライアントの再適応に利するため，誰でもこれを測定したいと願うはずですが，実にカラー・ピラミッド・テストは，適応問題に関連するこうした臨床項目を比較的容易に診断し得る，際立って特徴的なテストなのです。これらをカラー・ピラミッド・テストの反応から具体的にどのように診断するかは，第5章および第6章を基本とした向後の学習に委ねるとして，ここでは取りあえず，㊨の心理的状況の有無を診てみましょう。

「深刻な生活領域の狭まりや防衛機制」は，もし，選択される色彩数(色彩の種類)が極端に少ない(経過形式のASのスコアが高い)，狭い色彩選択の中で黒・灰などの抑制・禁止を投影する色彩の選択が多い，防衛的心理を投影するマント型構造がある，等々の徴表が重なれば，私たちの臨床的な経験は，これだけですでに，かなりの蓋然性を持って診断なし得ることを教えてくれています。もちろん実際の臨床的作業では，カラー・ピラミッド・テストの他の診断指標やテスト・バッテリーを組んだ他の性格診断テストの結果，さらには仮説を支持する現実的・実際の徴候，例えば引きこもりや学校不登校とか，いろいろな指標を精査してこれを確かめる道筋に進んでいかななくてはなりません。

さて，上に挙げた特徴の①から⑤までは，すでに述べましたように，カラー・ピラミッド・テストの実施上の特徴ですが，これらを総体として見ると，投影法性格検査としては大変ユニークで個性的な特徴です。因みに，投影法検査というものは，ほとんどすべてとあってよいほど，これらの特徴を裏返しにしたものに

なっています。即ち、投影法検査とは、「実施手続きに熟練を要し、被検者が反応することに苦痛や困難さを感じ、それ故反応時間も長くなり、テスト中に抵抗感や防衛心も少なからず生まれてくる。そして、結果の整理と解釈も難しく、主観的な判断に陥りやすい」といったものです。こうしたことから、カラー・ピラミッド・テストは、まずは破格の使いやすさを持った投影法検査であると言っても、決して過言ではありません。

そして、最後に挙げた⑥の解釈・診断上の特徴は、カラー・ピラミッド・テストが、臨床心理学的に深いレベルの次元にまで比較的容易に、しかも客観的に到達し得ることを示しています。

結論的に言って、カラー・ピラミッド・テストは、誰にでも容易に使いこなすことができるようになる、極めて利便的な投影法性格検査であると言い得ます。